



Title	英語の比較の指導における形容詞の扱いについて
Author(s)	巨理, 陽一
Citation	教授学の探究, 22, 143-150
Issue Date	2005-01-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/13653
Type	bulletin (article)
File Information	22_p143-150.pdf



[Instructions for use](#)

英語の比較の指導における形容詞の扱いについて

巨 理 陽 一

(北海道大学大学院教育学研究科博士課程)

はじめに

「英語には、様々なタイプの比較表現のために特殊化された豊かな形態・統語の体系がある」(Huddleston, 2002: 1099)。この英語における比較の指導の目標は、(1)に示されるそれぞれの比較表現をバラバラに提示することでも、(2)に示されるような表現を「イディオム」としてただ暗記させることでもない(Aは形容詞の原級を表す)。重要なのは、それぞれの表現を学習者が有機的に使い分けられるようにすることである。

- (1) *X is Aer/more A than Y*
X is as A as Y
X is less A than Y
X is the Aest/most A of S
- (2) *X is not Aer/more A than Y*
X is no Aer/more A than Y
No more than X...
No less/fewer than X...

本稿は、そのような指導を可能にする比較の教育内容構成に向けて、「比較の指導における形容詞の扱い」について論じるものである。

まず比較の指導における形容詞の位置づけについて論じ、続いて文法解説書での取り扱いを検討する。その上でCruse (1986)の形容詞の意味特性による分類を導入し、このような分類に基づくことの比較の指導にとっての意義について論じる。

1. 比較の指導における形容詞の位置づけ

教科書や文法解説書での比較の指導における形容詞の扱いは、ほとんどがその形態的側面に集中している。つまり、「比較を表すための形容詞・副詞の語形変化」(安藤, 1985: 122)に言及するばかりで、意味の側面には注意が向けられていない。

これは、比較の指導において形容詞の意味が重要ではないということだろうか。あるいは「それまでの指導で学習者は比較の指導に十分な形容詞の知識を持っている」と想定しているのだろうか。しかし、次の(3-4)について考えてみよう。

- (3) i a. *Kim is older than Pat.* b. *Pat is younger than Kim.*
(KimはPatより年上だ。) (PatはKimより若い。)
- ii a. *Yours is better than mine.* b. *Mine is worse than yours.*
(君のは僕のよりいいやつだ。) (僕のは君のよりも悪いやつだ。)

—————Huddleston (2002: 1125)をもとに作成

(3)の(ia-b)は一方が他方を伴立する(entail),つまり一方がその通りであれば他方も必ずその通りであるという関係にある。当然と言えば当然だが, KimがPatより年上であればPatはKimより年下であるし, PatがKimより若ければKimはPatより年上である。ところが(ii-a-b)の関係はそうではない。「(iia)があなたのものと私のものが良いのか悪いのかということに関して中立的であるのに対して, (iib)が両方とも悪いということ伝えるため」(Huddleston, 2002: 1125), (iib)は(iia)を伴立するが, (iia)は(iib)を伴立しないのである。つまり, 自分のものが相手のものよりも悪ければ——確かにどちらも“bad”なのかもしれないが——少なくとも相手のものは自分のものより良いものである。しかし, 相手のものが自分のものより良いからと言って——どちらも良品で, 高い質で比較しているのかもしれない——「自分の粗悪品は相手の粗悪品よりも悪い」とは言えない。

- | | | |
|-------|---|--|
| (4) i | a. <i>Kim is <u>older</u> than Pat.</i> | b. <i>Pat is <u>less old</u> than Kim.</i> |
| | (KimはPatより年上だ。) | (PatはKimほど年はいってない。) |
| ii | a. <i>Yours is <u>better</u> than mine.</i> | b. <i>Mine is <u>less good</u> than yours.</i> |
| | (君のは僕のよりいいやつだ。) | (僕のは君のほどよくない。) |

—————Huddleston (2002: 1125)をもとに作成

(4)の場合, 両例とも(b)は(a)を伴立するが, 逆は成り立たない。これは, 「(ia)ではKimもPatも若いことがあり得るのに対して, (ib)では両者とも比較的年を取っているということ伝える」(Huddleston, 2002: 1125)ためであり, 同様のことが(ii)にも当てはまる。つまり, 「PatはKimほど年はいっていない」と言えば——両者ともある程度の年齢であることが伝わり——KimがPatより年上であるということは明らかである。しかし, KimがPatより年上であるからと言って——両者は小学生かもしれない——「PatもオッサンだがKimほどオッサンではない」とは言えない。(ii)についても同様の説明が可能である。したがって(iia)の内容について自分を主題にし, かつ相手に失礼のないように伝えるためには, (iib)を用いればよいことが分かる¹⁾。

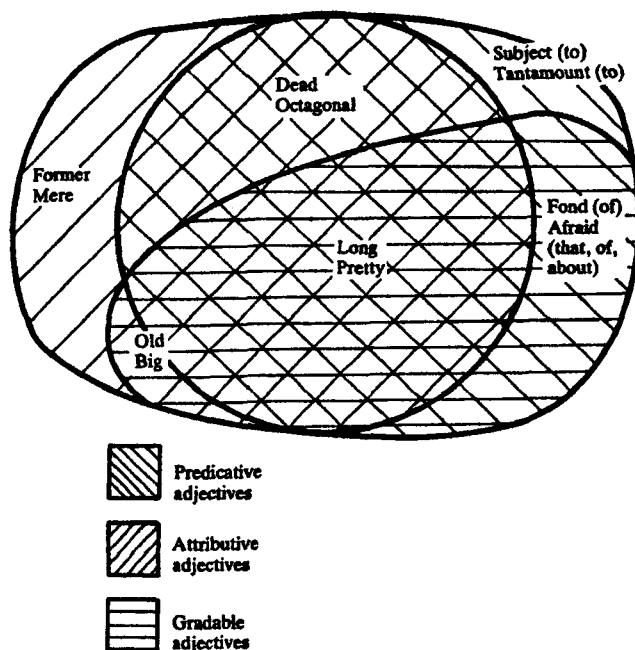
(4)では, (3)で伴立関係が一方向だった(iia)だけでなく, 両方向だった(ia)でも結果的に同一方向の伴立関係になっている。つまりこれは, ‘X is less A than Y’という「文の構造」がもたらした伴立関係である。したがって, (4ib)を「(両者ともある程度の年齢ではあるが)PatはKimほど年はいっていない」という意味にしているのは‘X is less A than Y’という文の形式だということになる。

逆に(3)の(i-ii)で伴立関係が異なるのは——両文とも‘X is **Aer** than Y’という文の構造は同じであるから——‘old’: ‘young’と‘good’: ‘bad’という形容詞(のペア)の意味特性の違いによるものである。つまり, (3iib)を「自分の粗悪品は相手の粗悪品よりも悪い」という意味にしているのは‘bad’という形容詞に他ならない。このことを知らずに(3iib)を用いると——仮に自分を主題にして(3iia)の内容を伝えているつもりでも, 意図せずに相手のものをけなすことになり——対人関係に悪影響を及ぼしかねない。

このように, 「比較の指導において形容詞の意味が重要ではない」ということにはならないばかりか, 比較における形容詞の意味は, (1-2)に挙げた諸形式と同様の重みを持っているときえ言えるのである。

次に, 比較に用いられる形容詞は「段階的」(gradable)でなければならない²⁾が, (5)に図示されているように, 段階的形容詞が覆うのは形容詞の一部に過ぎない。

(5)



—— Rusiecki (1985: 4)

そもそも現在の学校英語ではこのような分類が提示されることさえなく、「英語の形容詞をそれ自体として教えるべきなのか、教えるとしたらどう教えるのか」ということもほとんど明らかではない。少なくとも、(5)よりも一歩踏み込んで、それまでの指導で学習者が(3)のような事実を説明する知識を持っているとは考えられない。

さしあたり「形容詞それ自体の指導」という問題に直接言及することは措くとしても、より大きな教育内容の体系を考えたとき、「比較の指導において形容詞を扱うことが、学習者が形容詞を捉え直すきっかけになり得る」と考えている。そのためには、「英語の比較の指導に有効な形容詞の分類は何か」ということについて考察する必要がある。

2. 比較の指導にかかわる形容詞の取り扱い

比較についての解説の中で何らかの形で形容詞の分類を試みている数少ない文法解説書として、安藤(1985)が挙げられる。

安藤(1985)は、形容詞を(例えば、'old'と'youthful'のペアのような)「尺度形容詞」と('wise', 'stupid', 'happy'のような)「評価形容詞」に分けている。その上で、尺度形容詞のペアの無標のもの(上のペアでは'old')が比較構文に用いられると「相対的意味」を表し、評価形容詞は——どの比較構文で用いられても——常に「絶対的意味」を表すとしている(安藤, 1985: 119-120)³⁾。

相対的意味と絶対的意味の区別は、外国語として英語を教える教師のための文法解説書として定評のある Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) などでも強調されており、比較表現で用いられた形容詞の意味を捉えるために欠かすことのできない概念であると言える。例えば

(4 ia) (= (3 ia)) では「Kim も Pat も若いことがあり得る」ことについては、この相対的意味によって説明することができる。

しかし、問題も残っている。まず同等比較について、(上のペアで言えば‘young’のような)「有標の尺度形容詞が〔中略〕用いられた場合は、明確にマイナスの意味を表す」(安藤, 1985: 120)と述べている。したがって(6)のような文では、両者とも絶対的に「若い」ということ表すということになる。

(6) *John is as young as Mary is.*

(John は Mary と同じくらい若い。)

しかし安藤 (1985) には (3 ib) のような比較についての言及がないので、この有標の尺度形容詞についての説明が同等比較に限ったものなのか、それとも他の比較にも当てはまるものなのか明らかではない。つまり、その「マイナスの意味」が形容詞の意味特性によるものなのか、文の構造によるものなのかをハッキリさせる必要があると言える。

さらに、‘good’と‘bad’が評価形容詞に当たるとしたら、(3 ii) の‘better’も絶対的の意味を表すことになり、Huddleston (2002) の説明と合致しない。逆に尺度形容詞に分類されるのだとしたら、説明は合致したとしても、尺度形容詞と評価形容詞の分類の規準についての疑問が生じる。

3. 形容詞の意味特性による分類

形容詞が比較で用いられるための要件である「段階化可能性(gradability)は、その形容詞の意味構造にある尺度(scale)——関係のある次元(dimension)を段階化した尺度——が存在することを含意する。例えば形容詞‘old’と‘young’は“age”(年齢)という尺度についての単語であり、形容詞‘well’と‘ill’は“(good) health”(健康)という尺度についての単語だということになる」(Rusiecki, 1985: 3)⁴⁾。Rusiecki (1985)によれば、典型的に比較で用いられるのは上記のようにペアで尺度を定める反意的形容詞である (Rusiecki, 1985: 3)⁵⁾。

(7) ? *This box is light, but it's heavy.* —————Cruse (1986: 207)

反意的形容詞のペアは、(7)に示されるように、原級同士では同じ事柄について同時には成り立たない(?は、その文が意味的におかしいことを表す)。しかし原級と比較級については、同時に用いることができるものとできないものがある。Cruse (1986)は、このような原級で用いられたときの意味特性と比較級で用いられたときの意味特性の関係に基づいて、反意的形容詞を以下の三つ(ないしは四つ)の下位タイプに分類している⁶⁾。

(8) 極性的(polar)反意語

a. *It's short, but it's longer than the other one.*

(短いが、他のものよりは長い。)

b. *It's long, but it's shorter than the other one.*

(長いが、他のものよりは短い。)

例) *heavy: light, fast: slow, high: low, deep: shallow, wide: narrow, thick: thin, difficult: easy* —————Cruse (1986: 207)をもとに作成

まず(8)に示されるように——ペアの片方を原級で用いて、もう片方を比較級で用いた——(a-b)のような表現が可能である形容詞のペアを「極性的反意語」と呼ぶ⁷⁾。このグループに分類される形容詞のペアは、それぞれの比較級が相対的の意味を表す。

(9) 重複的(overlapping)反意語

a. *John's a dull lad, but he's cleverer than Bill.*

(Johnは鈍いやつだが、Billよりは利口だ。)

b. ? *Bill's a clever lad, but he's duller than John.*

例) *good: bad, pretty: plain, kind: cruel, polite: rude*

(9B) 欠如的(privative)反意語

a. ? *It's still clean, but it's dirtier than before.*

b. *It's still dirty, but it's cleaner than before.*

(まだ汚いが、以前よりキレイだ。)

例) *clean: dirty, safe: dangerous* —————Cruse (1986: 207-208)をもとに作成

次に、ペアの片方を原級で用いて、もう片方を比較級で用いた表現の一方だけが認められるものを「重複的反意語」(ないしは「欠如的反意語」と呼ぶ。このグループに分類される形容詞のペアは、片方の比較級が相対的意味を表すが、もう片方の比較級は絶対的意味を表すということになる。

「重複的」というのは、('good'や'clever'のような)片方の比較級が表す相対的意味(の尺度)が、('bad'や'dull'のような)もう片方の比較級が表す絶対的意味(の尺度)と重なっていることによるラベルである。それに対して(9B)は、片方の原級がもう片方の「欠如」の意味を表して排反的なペアを構成していることから「欠如的」と呼ばれる。しかし、比較級の表す意味としては(9)と同じふるまいを見せるので、ここでは重複的反意語の下位分類として位置づけられている。

(10) 両極的(equipollent)反意語

a. ? *It's hot, but it's colder than yesterday.*

b. ? *It's cold, but it's hotter than yesterday.*

例) *nice: nasty, sweet: sour, proud of: ashamed of, happy: sad*

—————Cruse (1986: 207-8)をもとに作成

最後に、ペアの片方を原級で用いて、もう片方を比較級で用いた表現が全くできない形容詞のペアを「両極的反意語」と呼ぶ。このグループに分類される形容詞のペアは、それぞれの比較級が絶対的意味を表す⁸⁾。

三つのグループの違いは、原級と比較級の関係以外にも指摘することができる。

まずCruse (1986)は、それぞれのグループの要素が典型的に言及する特性について述べている。極性的反意語は、「典型的に、評価的には中立で、客観的には記述的である。たいていの場合、基礎をなす尺度化された特性は、インチやグラム、毎時何マイルといった慣習的単位で計ることができる」(Cruse, 1986: 208)。重複的反意語は全て、「その意味の一部として評価的極性を持っている。つまり、一方は推賞(例えば, *good, pretty, polite, kind, clean, safe, honest*)であり、他方は非難(例えば, *bad, plain, rude, cruel, dirty, dangerous, dishonest*)である」(Cruse, 1986: 208)。両極的反意語は、「明白に主観的な感覚や感情に言及したり(例えば, *hot: cold, happy: sad*)、『客観的』基準にはなく、主観的反応に基づく評価に言及したり(例えば, *nice: nasty, pleasant: unpleasant*)する」(Cruse, 1986: 208)。

次に三つのグループは、'How X is it?'というパターンの疑問文などを形成する可能性に関しても違いがある。その特徴を次のようにまとめることができる。

- (11) a. 極性的 ペアの一方の要素だけが、通常の how 疑問文を認める (cf. *How long is it?*だが、? *How short is it?*)。そしてこの疑問文は不偏的 (impartial) である。
- b. 重複的 ペアの両方の単語が how 疑問文を認めるが、一方の単語は不偏的疑問 (例えば、*How good is it?*) をもたらし、一方の単語は態度言明的 (committed) 疑問 (例えば、*How bad is it?*) をもたらす。
- c. 両極的 ペアの両方の単語が how 疑問文を認め、両疑問文とも態度言明的である (*How hot is it?*, *How cold is it?*)。

—————Cruse (1986: 209) をもとに作成
つまり、(11a)の *How long is it?*について言えば、話し手は‘it’が指し示すものの長さについての前提や期待を何も表現していない。その意味で *How long is it?*は「不偏的」であり、用いるのに特定の文脈を必要としない。一方(11c)の *How hot is it?*では、「(‘cold’ではなく) ‘hot’が‘it’の指し示すものの記述に適切だ」という前提を伝えている。その意味で、*How hot is it?*は「態度言明的」であり、用いるのに特定の文脈を必要とする。

Cruse (1986)の分類に基づけば、(3)の違いを明確に説明することができる。つまり(3i)は、極性的形容詞の比較なのでどちらも相対的意味を表し、(Kim について述べているのか、Pat について述べているのかという違いはあるが) 同じ事態を表している (一方が他方を伴立する関係にある) と言える。それに対して(3ii)は、重複的形容詞の比較なので(a)の‘better’は相対的意味を表し、(b)の‘worse’は絶対的意味を表す。両者が「粗悪品」であっても「相対的にどちらがマシなのか」という関係は一義的に定まるので、(b)であれば(a)であると言うことが言える。しかし、(a)はあくまで相対的な関係を述べただけであるから、(b)であるかどうかは分からない ((a)は(b)を伴立しない)。

4. 形容詞の意味特性による分類の比較指導にとっての意義

Cruse (1986)の分類は、尺度形容詞と評価形容詞という二分の不十分さを補うだけではない。例えばミントン (2004) によれば、(12a)は「賢くない〔中略〕ことがわかっている兄を基準として、ジェーンがいかに賢くないか (つまり、馬鹿か)〔中略〕を強調している」(ミントン, 2004: 57)のだという。一方で、(12b)のように、「形容詞自体が否定的な意味を表す場合、このパターンには非難の程度を和らげる機能」(ミントン, 2004: 57-58)があるという。

- (12) a. *Jane is no cleverer than her brother.*

(Jane の馬鹿さ加減ときたら兄貴以上なんだ。)

—————ミントン (2004: 56) をもとに作成

- b. *Don't worry about your test result: it was no worse than anyone else's.*

(テストの結果は気にしなくてもいいよ。他のみんなと変らないから。)

—————ミントン (2004: 58) をもとに作成

このような‘X is no A(er)/more A than Y’タイプの比較を指導する際、Cruse (1986)に基づく形容詞についての理解があれば、重複的形容詞 (や極性的形容詞) が「肯定的」意味の場合は「いかに A じゃないか (=A じゃない Y と同じくらいだ)」という意味を表し、重複的形容詞が「否定的」意味の場合は「それほど A じゃない (Y と同じくらいだ)」という意味を表す、と説明できる⁹⁾。

さらに、両者に共通する‘*X is no A er/more A than Y*’タイプの比較の本質的意味を「*X*は想定よりも*A*の程度が低い(*Y*と同じくらいだ)」と表現することができる。一見すると(12 a-b)は全く異なる意味を表しているように思えるが、このような文の構造が表す意味を認識することも、上記の形容詞の意味特性を比較の教育内容に含めることで無理なく、つながりを持った形で行われるだろう。つまり、比較の指導における「本質的意味と諸用法のはっきりした認識」(根本, 1987: 44)のためにも「比較においてどの形容詞が相対的意味を表し、どの形容詞が絶対的意味を表す(つまり、ある種の態度を言明する)のか」ということの理解が必要だと考えられるのである。

註

- 1) ただし、ミントン (2004) によれば‘*X is less A than Y*’タイプの比較が「自然な英文と認められるのは、その形容詞がいったん使われたあと、意味を限定するために再び less をつけて用いるとき」(例えば, *Pat is old, but he is less old than Kim*) で、‘*X is not as A as Y*’タイプの比較にするほうが一般的だという(ミントン, 2004: 75-76)。ここでは、その問題には立ち入らずに Huddleston (2002)の例をそのまま用いた。
- 2) 「ある特性(この特性は、英語では典型的に形容詞によって示される)の所有に関して二つ以上のものを比較する際、必ずというわけではないが、たいていはこの二つ以上のものがくその特性を同じ程度に持っているのか否か」ということを問うのが適切である」(Lyons, 1977: 271)。
- 3) 反意的形容詞のペアの「有標性」(markedness)については、Lyons (1977)や Givon (1978), ホフマン & 影山 (1986)を参照。亘理 (2004 a, 2004 b) では、ここでいう尺度形容詞を「否定」の教育内容に組み込んでいる。
- 4) 「比較可能性は、『程度に異なりがあるということ』あるいは『尺度上に並べることを許すということ』と同一の広がりを持つ意味的特性である」(Bolinger, 1967: 4)。
- 5) 「尺度を定めるためには、二つの形容詞は少なくとも段階的で、同じ語彙場(lexical field), すなわちその一つひとつがくその集合の他のどんな語彙素とも、ある点では意味論的に関連しているが、同時には共起不可能である」というような語彙素の集合から出てくるものでなければならない」(Rusiecki, 1985: 5)。Rusiecki (1985)はさらにその反意性のタイプに応じて形容詞の下位分類を行っているが、ここでは立ち入らない。
- 6) Croft & Cruse (2004), あるいは Cruse & Togia (1995)では、それぞれを図示した上で、この分類に認知言語学的な分析を加えている。「形容詞が表す尺度を(教育内容として)どのように図示するか」ということについては、稿を改めて論じることにした。
- 7) Cruse (1986)は、「相対的意味」という言葉ではなく「原級の‘pseudo-comparative’」という表現を用いている。また「絶対的意味」に対しても「原級の‘true-comparative’」という表現を用いている。
- 8) Croft & Cruse (2004)によれば、両極的反意語が表す関係はさらに、(‘cold’& ‘hot’のペアが表すような)「離接的」(disjunct)なものと(‘hard’& ‘soft’のペアが表すような)「並列的」(parallel)なものに分けられるという(Croft & Cruse, 2004: 170)。しかし、この区別がさしあたりの問題に関係しないことと、並列的な関係を表す両極的反意語が離接的なものと比べてきわめて稀であることから、ここではその下位分類を取り上げなかった。Croft & Cruse (2004)は両極的反意語について、「ここに分類される形容詞のペアの数は言語間で異なるように思える」とも述べている(Croft & Cruse, 2004: 182)。
- 9) ただし、ミントン (2004) は「否定的な意味」という表現を用いているが、これは「否定極性」という意味ではなく、ここでいう重複的反意語の「非難」のことを指していると考えるべきである。このタイプの文に‘short’や‘light’の比較級を用いたからといって、ミントン (2004) が言う意味で「非難の程度が和らぐ」というわけではない。

典拠文献*

* (12 b) をのぞき, 日本語訳はすべて引用者による。

- Bolinger, Dwight Le Merton (1967). "Adjectives comparison: a semantic scale." *Journal of English Linguistics* 1. pp. 2-10
- Croft, William & Cruse, D. Alan (2004). *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, D. Alan (1986). *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney (2002). "13 Comparative constructions." In Huddleston, Rodney & Pullum, Geoffrey K. (eds.). pp. 1097-1170
- Huddleston, Rodney & Pullum, Geoffrey K. (eds.). (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, John (1977). *Semantics (2 vols.)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rusiecki, Jan. (1985). *Adjectives and comparison in English: A semantic study*. London: Longman.
- 安藤貞雄 (1985) 『続・英語教師の文法研究』大修館書店
- 根本義文 (1987) 「現在完了をどう理解させるか: その本質の意味と用法の指導」『教授学の探究』(No. 5) 北海道大学教育学部教育方法学研究室, pp. 42-80
- T. D. ミントン著, 水嶋いづみ訳 (2004) 『ここがおかしい日本人の英文法III』研究社

参考文献

- Celce-Murcia, Marianne & Larsen-Freeman, Diane (1999). *The Grammar Book An ESL/EFL Teacher's Course (2ed.)*. Boston: Heinle & Heinle.
- Cole, Peter (ed.). (1978). *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*. New York: Academic Press.
- Cruse, D. Alan & Togia, Pagona (1995). "Towards a cognitive model of antonymy." *Lexicology* 1. pp. 113-141
- Givón, Talmy (1978). "Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology." In Cole, Peter (ed.). pp. 69-112
- Th. R. ホフマン&影山太郎 (1986) 『10日間意味旅行』くろしお出版
- 亘理陽一 (2004 a) 「英語における否定の指導」北海道大学大学院教育学研究科修士学位論文
- _____ (2004 b) 「英語における否定の教育内容構成」『教授学の探究』(No. 21)北海道大学大学院教育学研究科教育方法学研究室, pp. 9-33